

ロシア・ウクライナ情勢の影響(第3報:農業分野)

標記情勢がアゼルバイジャンの主要産業である農業分野にどのような影響を与えているか、いくつかの関連企業から状況と見通しについて聴取しました。

1. デベチ製粉工場(シャブラン県)

「1日350トンの小麦粉を生産し、バクーほか国内各地に販売しています。小麦粉の輸出は政府により禁止されています。」

「小麦の調達先は2割が国内(当県周辺、ジャリラバド県)、8割が輸入(多くをロシア、ほかカザフスタン)であり、鉄道輸送により搬入しています。」

「これまでロシア・ウクライナ情勢の影響はなく、現在の契約によるロシアからの調達に滞りは見られません。なお、2014年まではウクライナからも輸入していましたが、クリミア危機以降同国からの調達は止まりました。」

2. ギラジ小麦粉・飼料工場(フズ県)

「1日200トンの小麦粉を生産し、全量を国内販売しています。飼料の販売先は国内8割、輸出2割(イラン、ジョージア等)となっています。」

「原料の小麦は2~3割が国産です(バイラガン県周辺)。今年から解放地域で小麦の収穫が始まるので、国産小麦の調達比率が上昇する見込みです。」

「輸入小麦の多くはロシア、ほかカザフスタンからも輸入しています。現時点でロシア・ウクライナ情勢の影響は特段なく、また備蓄も十分にあります。」

3. シヤザン・ブローラー社(シヤザン県)

「当社は民間の上場企業で、国内ブローラー市場シェア60%を占める最大手です。」

「ロシア・ウクライナ情勢により、飼料の確保が懸案となっています。飼料(大豆・トウモロコシ)の多くをロシアから鉄道で輸入していますが、同情勢の影響でロシアの大豆輸出が禁止となり、トウモロコシ輸出が割当制になったので、対策が必要です。大豆はアルゼンチンからも輸入していますが、輸送日数や費用面の負担が大きいです。トウモロコシは輸入(主にロシアとウクライナ)と国内調達に依っていますが、国内調達には限りがあります。」

(以上)